

キリスト教学校教育同盟事務職員夏期学校で感じたこと

林 智 義

毎年7月に開催されている事務職員夏期学校は、今年で53回目を迎えました。この夏期学校は、1899年に発令された文部省訓令12号（宗教教育を禁じる法令）に対するキリスト教主義各校の協力体制が契機となって誕生した「キリスト教学校教育同盟」が主催しているものです。夏期学校には全国の同盟加盟校から百数十名の職員が集まり、2泊3日の日程で、キリスト教学校で働く意義について他校の職員と意見を交わし、キリスト教学校職員としてのアイデンティティーについて考える研修機会としています。もちろん、関西学院からも、毎年若手職員数名が夏期学校に参加しています。私自身は5年前から事務職員夏期学校の実行委員を拝命し、昨年と今年は実行委員長をおおせつかり、貴重な経験をさせていただきました。

昨今、教育行政の変更、価値観の多様化、社会のフラット化、学校経営の財政問題など、教育現場を取り巻く状況は大きく変化しています。そのような環境変化の中、多くの国公私立学校はそれぞれの考えに基づき、特色のある学校経営・運営を行おうとしています。多くのキリスト教主義学校も然り、関西学院も然りです。経営的に見ると、他校は良き競争相手であって、切磋琢磨すべき存在ですから、「共に仲良し」ではすまない関係にあります。しかし、一方、現代社会が抱える様々な問題を考えるときに、それらに立ち向かっていく若い人物の育成に関わり、研究活動を通して社会貢献するという学校本来の目的に照らせば、勤める学校は異なっても夏期学校に集まった職員は同志であるとも思えました。

キリスト教学校には私立学校としての建学の精神があり、建学の精神をわかりやすく伝えるモットーを持つ学校も少なくありません。しかし、それらの言葉で示された建学の精神やモットーを、過去の創立者の言葉、あるいはお題目としてしか説明できない学校になってしまっているとすれば、その学校はかなり危機的といわざるを得ません。建学の精神をいかに現代社会に通用する形で社会に発信し、具体的な教育実践として積み重ねていくことができるかという重い課題を各校は負っているのです。その点において関西学院はどうなのだろうか、今私が携わっている国際学部はどうなのだろうか、と自問しつつ、他校の同志たちと切磋琢磨していきたいと思われています。

（国際学部開設準備室）